

## カテゴリー

---

脳卒中 脳科学

## タイトル

脳卒中後における視空間無視と運動感覚欠如の関係性 Relationship Between Visuospatial Neglect and Kinesthetic Deficits After Stroke

## 内容

---

### 背景

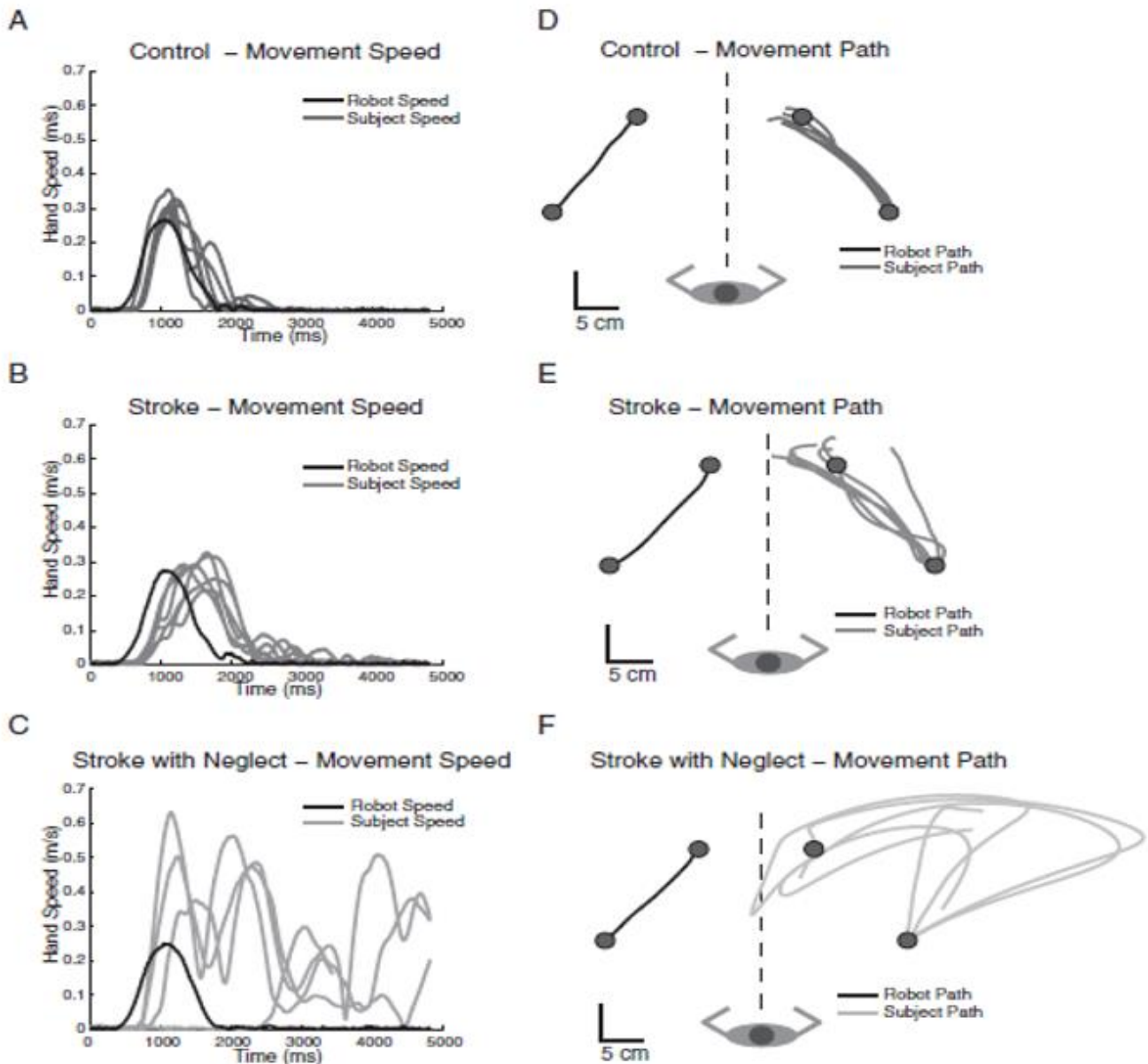
・脳卒中後、視空間と運動感覚（四肢の動きの感覚）の欠如は、それぞれの個体において約 30-60%に共通して発生する  
・視空間と運動感覚欠乏の両タイプは、日常の機能に必要な空間処理の側面に影響を与えており、脳卒中後の視空間と運動感覚の欠如における両間の関係性を検討

### 目的

・行動無視テスト（BIT）と運動感覚機能のロボット尺度を使用して、脳卒中後における視空間と運動感覚の欠如、両間の関係を特徴づけること

### 方法

・視空間無視（BIT を使用）と運動感覚（ロボットを使用）は、脳卒中後から平均 18 日の 158 人で測定  
・Stroke 群内で FIM&FIM Motor の点数度合いで群分け  
・運動感覚の整合課題は、脳卒中の影響を受けている上肢を、予め設定された方向・速度・大きさにロボットが誘導  
・脳卒中者の上肢は、脳卒中者の元来の上肢運動を感じると、影響を受けないもしくは受けても影響の少ないロボットの動きに整合される



◇視空間無視を認めない群と視空間無視を認める群での運動スピードと運動軌跡（運動コントロール）の違いが見て取れる ◇深部感覚は客観的な評価は難しく、患者の反応から汲み取る主観的な要素が強いため、臨床的にもかなりグレーな機能の一つだが、知覚-運動統合の面からみた介入の重要性が浮かぶ

## 結果

- ・視空間無視を認めない脳卒中者の運動感覚は、59%が損なわれていたのに対し、視空間無視を認める脳卒中者は、運動感覚を100%の割合で損なわれていた
- ・視空間無視を認めない脳卒中者において、BITにおける得点が満点または満点に近い得点の脳卒中者（49%）と比較して低得点ではあるが、許容得点を上回るBIT得点を持つ脳卒中者（78%）は、損なわれた運動感覚行動を高い割合で示した

## 結 語

・脳卒中後における視空間無視の存在は、運動感覚の欠如を高度に予測する ・しかしながら、運動感覚の欠如が必ずしも視空間無視の存在を示すわけではない ・この結果は、視空間無視者において、脳卒中後の運動感覚の欠如の評価と治療の重要性を強調する

## 明日への臨床アイデア

---

・深部覚自体には重度な低下がないにも関わらず、動作中における視空間処理の過程に麻痺肢の運動コントロールを組み込むことのできない何らかの要因があると思われる ・高次脳のバッテリー上、あるいは静的な訓練場面では無視症状は認めないが、更衣動作・歩行のような Dynamic な動作を要求される場面となると、無視症状を強める方を临床上よく目にする。 ・ただ無視側に注意喚起を促す反復的治療ではなく、その要因は何なのか（姿勢不安定性 etc.）を知覚・運動統合の側面、またはそれをしやすい状態は？といった観点から考えてみる必要性はあると思う。 ・視空間訓練においても上肢運動を伴った知覚-運動アプローチの必要性が窺われる。